女がテロリストになるとき

――夢野久作「ココナットの実」論――

脇坂健介

［キーワード　①夢野久作　②サディズム　③マゾヒズム　④テロリズム　⑤スペクタクル］

はじめに

「ココナットの実」は、一九三一年（昭和六年）四月に『新青年』に発表された短編で、「エラ子」という少女の手記で構成されている。つまりエラ子の一人称語りという形式をとっており、その手記の中に挟み込まれた新聞が報じる事件についてエラ子の視点から描かれている。その事件とは、エラ子の住む「ゴンロク・アパート」前で、爆弾が爆発したというものである。新聞は「××党の爆弾」と騒ぎ立てるが、エラ子はそれを「トンチンカン」だとし、その「真相」を手記にしたためていく。

それによればエラ子は爆弾の被害者・赤岩権六の妾であり、「ゴンロク・アパート」に囲われていた。彼女の世話をするインド人のハラムと共に暮らしていたエラ子だが、突然その日「淋しく」なってしまう。それをハラムに訴えると、すべては「神様」によって支配された「運命」なのだと教えられる。またハラムは「ココナットの実」の存在を話し、それが周囲の人物の「運命」を変えるという。その後、エラ子は共産党員であり自身の愛人でもある「狼」こと「中川」と話をするが、その過程で中川は権六を殺害するために、エラ子に「ココナットの実」という名の「爆弾」を渡す。アパートの上から落とすと約束するエラ子は、その時を待ち構えるが、エラ子の部屋を出た中川は偶然にも権六とアパートの入口で鉢合わせしてしまう。中川は自身も爆弾を所持しており、爆発が起きるのではと期待するエラ子だったが、何も起きず、二人はただ口論をするのみであった。そこでエラ子はもう一つの「ココナットの実」である爆弾を落とし、あたり一面を壊滅させる。そしてその後、エラ子はハラムを射殺したことを記して物語を閉じるのだった。

「ココナットの実」において注目されるのは何といっても、主人公であるエラ子だろう。谷口基は、その例としてエラ子も挙げながら、久作の描く女性について「宿命的に自己とその周

囲の人間関係に不幸や災厄を招来する悲劇的な星のもとに生まれ」ており、「一括りに〈運命の女〉などと呼ぶことにためらいをおぼえさせるほどに個性的、魅力的な風貌をそれぞれそなえている」とし、「久作は必ずどこかに、善意や天真爛漫さ、愛らしさの片鱗を彼女らの裡にとどめようとしていたかに思われる」と指摘している。[注1] これまであまり注目されてこなかった夢野久作の「女性像」に関する言及であり、興味深い論評である。これは種村季弘が「ココナットの実」を論じた際に述べた「生まれたまんまのすっぽんぽんのようなヒロインは、何食わぬ顔をして一瞬のうちに世界を爆砕してしまう。無垢はどうかすると極悪である」という指摘と響きあうだろう。[注2]

また谷口は他の文章でも「ココナットの実」を論じ、「久作の筆は、〈公共の敵への断罪〉などといったモチーフを軽々と飛びこえ、政治も思想も党派性も笑殺する人間の業の深さ、虚無の上に立つ無限の欲望を衝くところにまで到達している」とする。その上で、ココナットの実に例えられる「炸裂弾」が、左右を問わず「革命を希求する者たちの最後の一手に選ばれてきた」ことを指摘し、そうした道具がエラ子の「淋しさ」によって用いられ、全てを吹き飛ばしてしまうことに注目している。[注3]

「ココナットの実」の魅力が、「暗い情念」と「無垢」・「天真爛漫」とが表裏一体となった主人公・エラ子の特質にあることは確かだとしても、彼女の特質に「ココナットの実」の全てを回収してしまうことには問題があると思われる。本論文では「ココナットの実」を女性の暴力、とりわけテロリズムという視点から見直していきたい。

第一節　エラ子の「淋しさ」

まず、爆弾を手に入れる前のエラ子に注目してみることにしよう。事件当日、エラ子はいつも「おひる頃まで睡たい」のに、なぜか朝に起きてしまい、急に「淋しい」と感じるようになる。そしてその記述は次のように続けられる。

窓の外は神戸の海岸通りの横丁になっていた。左手に胡粉絵みたいな諏訪山の公園が浮き出している。右手の港につながっている船の姿がまるで影絵のよう。その向こうから冷たい太陽がのぼって、霜の真っ白な町々を桃色に照らしている。窓硝子が厚いから何の音も聞こえない。

このような「シンカンとした景色を見ているうちに」エラ子は「ヘンに淋しく」なってしまうのである。こんなことは「今までに一度もなかった」と語るエラ子は、視線を外から部屋の中へ移す。

部屋の中は「隅から隅まで印度風」に「凝り固ま」り、その奥の「化粧部屋」や「浴槽」も、権六の「金ピカ趣味」全開の「ピカピカチカチカ」したものとして記述され、「見れば見るほど淋しい、つまんないもの」として語られる。冒頭で描かれているのは、窓外の風景と部屋の様子、そしてそれを見たときに感じるエラ子の「淋しさ」である。しかしそれとともに重要なのは、エラ子が周囲に対して抱く認識であろう。エラ子が見る外の景色は、硝子が厚いために「音」がせず、「胡粉絵」や「影

絵」として語られ、現実の空間というよりは奥行きや実在感のない「絵」として認識されている。また同じく部屋の中も、生活感が薄い「印度風」の装飾や人工的で「ピカピカ」したものに覆われた空間であるとされている。つまり「淋しさ」と空間との関係を辿るならば、外の風景や極度に人工的な装飾がされた室内の光景からリアリティや生活の実感を得ることができないという、現実感の喪失にその原因があるといえるだろう。

エラ子はこのような「淋しさ」を「綱渡りの途中で綱が切れちゃって、そのまんま宙に浮いているような気持ち」「暗いところへグングン落ち込んでいくような気持ち」であると語る。世界や日常から切り離され、現実との接点を喪失した〈宙吊り〉の感覚とエラ子の「淋しさ」は結びつくのである。「童貞」であるハラムに湯にいれてもらうことをエラ子は「ステキな冒険」と称するが、そこには、ハラムに襲われれば、現実感を失った「淋しさ」から抜け出せるのではないかといったエラ子の秘かな期待をうかがうことができるだろう。

だが、この朝もハラムはエラ子を襲うことはなく、「従順な妾の家来」になり「お姫様」としてエラ子を扱うのだ。しかもハラムは「淋しさ」の理由を教えてくれるよう求めるエラ子に、それは「運命」であると答えるのである。

何事も運命で御座います。私はお姫様の運命をはじめからおしまいまで存じているので御座います。あなた様の過去も現在も、未来の事までも、残らず存じているので御座います。この世の中の出来事という出来事は、何一つ残らず、運命の神様のお力によって出来た事ばかりなのです。

このようなハラムの言葉にエラ子は「身体がしびれてしまったように」なり、「動くことができなくなって」しまう。ハラムはそんなエラ子に、「運命」という構図が分かってきたから「眼にも見えず、心にも聞こえない何ものかを探し求め」ているのであり、それゆえに「淋しい」のだとたたみかける。その上で、今日に至るまでの全てはハラムが「運命の神様のお力」を借りておこなってきたのだと打ち明ける。ハラムによれば、自分は「霊魂を支配しております神様の御命令」に従って生活しており、エラ子と権六の関係や中川との「お伽」の関係、そしてハラムとエラ子の「御守」の関係もすべては「運命」の神の命令によるものだというのだ。すべては「運命である」というハラムの論理に対し、その説教が「ハッキリ」と分かったと語るエラ子は、ハラムの話が終わると泣き出してしまう。しかし涙は「何故だかわからないまんま」に流れ出したもので、「ハラムのお説教とは何の関係もなしに胸が一パイになって来て仕様がなかった」とエラ子は言い出すのだ。

エラ子はハラムの「運命」の論理を全て理解したと語りながらも、それとは無関係な感情を抱いている。ハラムはエラ子の「淋しさ」を自分の「運命」論に回収しようとするが、ハラムとエラ子の間にはこの「運命」論を巡ってずれが生じ始めているのだ。実際、この「運命」を知ったことで「胸がスウーとして来た」とも感じるエラ子は、「何だか生まれかわったように気が軽くなって」、ハラムに「妾の運命を支配する術」や「自

分の運命でも他人の運命でも、自分の思い通りに支配する術を教えて頂戴」とねだるのである。これにはハラムも「イヨイヨ泡を喰った」ようになってしまうしかない。なぜなら、ここでのエラ子はハラムの「運命」論を自分の都合のいいように横領しているからだ。「運命」を支配しているのは「神様」であり、自分はそれに従っているだけだと語っているハラムに対し、エラ子は自らの手で自分どころか他者の「運命」さえも支配しようとするのである。ハラムによれば、権六や中川をエラ子に近づけたのも「運命の神様」の「御命令」なのだが、それをエラ子は「他人の運命」を「自分の思い通りに支配する」ことだと受け取っている。そのような曲解は「気が違うほど恐い眼だの、アブナッカシイ眼にだの会ってみたく会ってみたくて仕様がない」ので「あたしの運命」を「おまえの力で、死ぬほどおそろしいところに導いてくれてもいい」という発言にも見ることができる。エラ子は「運命の大神様の思召し」によって「天の端までも支配されている」という「運命」を個人的な都合によって変更できるものと見なしているのだ。しかもエラ子は自らの抱える「淋しさ」の説明として「運命」論を聞き、自身に危機をもたらすことができるものとして「運命」論に期待してもいる。このような危機への期待は入浴中にハラムに襲われる期待とも響きあうが、しかしそれはハラムの「運命」論をそのまま受け入れるのではなく、エラ子がその「運命」論を横領し読み替えることで、自分ばかりか他者をも支配することが可能なのではと考えるようになったからなのである。自らを危機に直面させることで、「淋しさ」を解消することを願っているエラ子だが、同時にその陰には他者を思いのままに操りたいという欲望をわだかまらせているのである。

エラ子はハラムに対し、支配の方法を教えてもらう代償として自らの「身体」を与えようと更に迫る。そしてそれに対するハラムの反応を見て、エラ子はハラムが「運命の神様」から「妾を生涯の妻とするように命令られているに違いな」いと考える。その「命令」の下、ハラムは「妾の心を捉える機会を、毎日毎日」探っていたのだろうと思うエラ子だが、ここでもハラムが説明した「運命」論とは違う理解がなされている。ハラムのいう「神様の命令」ならば、ハラムはそれに従うだけでいいのであり、ハラム自身が自らの意思で機会を探る必要はないはずだからである。

しかしそのようなずれを知ってか知らずか、そこでハラムは「ココナットの実」について語り始める。「ココナットの実」とは、「印度のインターナショナル」から手に入れた「爆弾」であり、ハラムはその取次をしているという。そして二つある「ココナットの実」はエラ子が良く知っている「ある人」の手に渡り、その結果「ココナットの実」は「その方」と「よく御存じのモウ一人の方の運命を支配」して、「お二方ともお姫様のところへは二度とお出でになる事が出来ないような、恐ろしい運命に陥られる事に」なるだろうという予言を明らかにする。

ところがエラ子は「お姫様は……」と続けようとするハラムの言葉を奪い、「キットお前一人のものになると云うのでしょ

う」と言い出すのだ。それを聞いてハラムは「真赤な上に真赤」になり、「平蜘蛛のようにヒレ伏して」しまう。エラ子はここでも、人を支配する「神様の命令」であり、「運命」を語るハラムの言葉を横領し、自らの言葉をその文脈に乗せるのだ。しかもそこで自らを「お姫様の奴隷」だといい、にわかにマゾヒスト的傾向を露わにするハラムはもはやエラ子の言葉を否定しない。「神様の命令」であったはずの「運命」の予言が、この場面でエラ子の命令に置き換えられ、ハラムが従うのは「神様」ではなく、エラ子になり始めるのである。

第二節　サディズムとファシズム

こうして「ココナットの実」には、サディズムやマゾヒズムとも微妙に関わるエラ子による支配の問題が導入される。そしてこうしたサドーマゾ的支配は、作品が発表された時代に起こったテロとの奇妙なずれを辿ることでより明確になるだろう。そのためには、まず共産党員の中川によって語られる権六へのテロについて、同時代言説との関係を見ておく必要がある。エラ子のもとを訪ねる中川は権六へのテロを仄めかして以下のように語っている。

あいつは財界のムッソリニです。彼奴はお金の力で今の政府を抑え付けて、亜米利加と戦争をさせようとしているんです。現在の財界の行き詰りを戦争で打ち破ろうと企んでいるのです。日本は紙と黄金の戦争では世界中のどこの国にも勝てない。下層民の血を流す鉄と血の戦争以外に日本民族の生きていく途はない。不景気を救う道はないと高唱しているのです。彼奴はこの世の悪魔です。吾々の共同の敵なのです。

ここで語られているいくつかの言葉に注意すべきだろう。まず赤岩権六は新聞でも「財界のムッソリニ」と語られている人物である。もちろん「ムッソリニ」とはイタリアの首相としてファシスト党を率いたムッソリーニだが、興味深いことに「大正から昭和初期」に「英雄としてのムッソリーニ像」が日本にはあったという。[注4] 一九二〇年代の後半には「ムッソリーニが「偉人」にふくまれて」おり、そうしたブームの背景には「当時の日本の政治・社会状況（特に既成政党）への不満」があり、それがムッソリーニを「『英雄』たらしめた」というのだ。[注5]

しかしこの作品の中での権六に対し、「英雄的」なイメージを持つことは難しい。単に漠然としたファシズムの象徴として「ムッソリニ」のイメージが取り込まれていると考えるのが妥当ではないだろうか。というのも権六が圧倒的な人気を誇る政治家ではなく、卑しさと底知れぬ不気味さを持つ「高利貸」であるからだ。では、権六がファシストだとすれば、共産党員である中川が計画する彼への攻撃はいかなるものとして考えられるだろうか。「財界のムッソリニ」とも呼ばれ、高利貸でもある権六には、中下層の人々を食い物にする当時の財界のイメージを、その賤しさを誇張する形で投影されているとみることもできる。実際こうしたイメージをもたれていた財界に対し、右翼によるテロが行われていたからである。

例えば一九二一年には朝日平吾によって安田財閥の安田善次郎が殺害されている。一九三二年には血盟団事件が起き、三井財閥の団琢磨が殺害される。同年の五・一五事件や、一九三六年の二・二六事件もこうした財閥への批判に基づいて、それと癒着しているとみなされた政界を主なターゲットにしたことはよく知られている。五・一五や二・二六の軍事クーデターにもテロの要素が含まれていたとするならば、これらのテロリズムに共通するものは何か。それは端的にいえば財閥と政治家が癒着し、不当に利益を得ているという見解にもとづく不満なのだ。例えば朝日平吾のテロについて、片山杜秀は「天皇と国民を遮り、父親が子供に平等に分け与えるべきさまざまな権利や富を横取りしている者」である「元老、政治家、家族、顕官、そして大富豪」を「物理的に排除するのは、子供の権利」だとする理屈に支えられていたと述べている。[注6] このような論理によって行われた朝日のテロは、天皇が親ですべての国民はその赤子であるという家族国家観に基づいているが、その天皇と赤子を遮っているものとして批判される存在こそが癒着した政財界であり、血盟団事件もまた、「私利私欲に没頭する特権階級」として、特に財閥をターゲットに起こされたものだ。[注7]「ココナットの実」が発表された一九三一年前後の国内では、政党や財閥を中心とした財界への不満が高まり、それが軍部や右翼を中核とするテロリズムを成立させる空気を作りだしていたとみることができるのである。

ところが、こうした時代の流れに対して、「ココナットの実」では実際には起こらなかった共産党員による財界人へのテロが実現寸前の事態として描かれる。確かに当時の状況に照らせば、中川が「財界のムッソリニ」権六を狙う理由としては、経済のために戦争を起こすという資本主義の暴走によって、国家による経済統制が起こり、「市場経済にファシストによる「命令経済」が大きく割り込んで」くることへの抵抗であったと考えることが一応はできるだろう。[注8] だがこのような主張を掲げた左翼によるテロは起こらなかった。現実に起きたのは先述した右翼や軍部による政財界への攻撃であり、この点において作品と歴史的事実の間にはずれが生じているのだ。

しかも「ココナットの実」におけるテロにはもう一つ大きなずれが存在している。それは標的とされた高利貸・権六の人物像である。権六の姿は、先述したテロや批判の対象とされた財界人のイメージが賤しく不気味に誇張される形で持ち込まれているところがあるが、しかしそうしたイメージとも異なる微妙なずれが存在している。つまり「紙と黄金」による経済的な戦争を断念し、「血を流す鉄と血の戦争」を是とし、対米戦争を起こすことで不景気を救おうとする権六の姿は単なる財界人とは異なり、政界や軍と親密な関係を結び、時には裏から操ろうとする政商や黒幕を思わせるところがあるのだ。例えば作品発表前後から徐々に始まる暗躍を鑑みれば、軍部と密接な関係を築き、「最高責任者の一人」として満州に君臨した岸信介や、その岸によって満州に呼び込まれた新興財閥・日産の姿がそうした黒幕的かつ政商的な存在として思い浮かべることができる

かもしれない。[注9] あるいは戦後明らかになることではあるが、海軍の物資調達を担当することで、政界への影響力と資産を得た児玉誉士夫などを挙げることもできるだろう。[注10] このように軍と密接な関係を結ぶことでテロの対象とはならず、政治力や資産も得ることに成功した財界人や官僚などを黒幕や政商とするならば、権六にもこのような側面が示唆されていると見ることができる。つまりテロの対象になり難い黒幕的存在がターゲットとされること、それが「ココナットの実」の二つ目のずれなのだ。こうした二つのずれを抱え込んだ「ココナットの実」のテロは、一九三〇年代のテロリズムの中心的な論理から外れたテロだとみることができるのである。それゆえ「ココナットの実」における権六への爆弾テロは、当時のテロの論理や右翼・左翼のイデオロギー、政治的な目的・意図で説明しきれないものがあることになろう。しかし、そのような歴史的事実との説明し難い距離があるからといって「ココナットの実」におけるテロが意味不明なものと処理されてしまってよいのか。むしろもっと幅広い文脈の中で問うべきテロの姿がここにはあるのではないか。そしてそのことを考察するための手がかりとなるのが、サディズムとマゾヒズムの問題なのだ。

実際、ハラムがエラ子にひれ伏し、自らを「奴隷」と見なして「お姫様」のエラ子に仕えるところには、サドーマゾ的な関係性をみることができる。またエラ子は中川との関係についても、「あんたが呉れた赤い表紙の本を読んでいるうちに、あんた以上の共産主義になっちゃったのよ」と述べ、「あんたが妾にサクシュされて、どんな風にガラン胴になって、どんな風に血を吐いて死んで行くか、見たくって見たくってたまんなくなったのよ」と語っており、同じようにサドーマゾ的関係を読みとることは可能だろう。実際これを聞いた中川は「泪をポトリポトリ落とし」てエラ子の脚の間に「身体を投げ伏せ」てマゾヒスト的な服従を示し始める。しかもここで中川よりも「共産主義」者になったと語るエラ子は、共産主義によって批判されるはずの資本家として自らを規定し、中川を「サクシュ」しようとする。ここでもハラムの「運命」論と同じように、男性側の主張を捻じ曲げる、解釈の横領がみられる。エラ子はハラムの場合と同様に、相手の言葉を曲解することでも自らをサディスト的な支配者側へと位置づけようとしているかにみえるのだ。では、こうした支配／被支配の関係からエラ子をサディストとして規定することは可能なのだろうか。

サディズムとマゾヒズムについては、一般的には嗜虐と被虐の関係においてお互いに快楽を得るような対称性のあるカップルという印象を持たれることが多いだろう。だがこれに対してジル・ドゥルーズは「マゾヒストが「いためつけてくれ」という。するとサディストが「ごめんこうむる」というものである」という話を挙げ、サディストとマゾヒストがお互いを必要とするカップルのような存在ではなく、むしろ両者が非対称性を持っていることを強調している。[注11] サディストにとって、自らの拷問や虐待で喜びを感じるようなマゾヒストは好ましい相手ではない。サディストが求めるのは、自分の行う拷問に快楽を見

出すのではなく、本気でもがき苦しむ相手なのである。そしてマゾヒストもまた、自分が快楽を感じるように拷問や虐待を行ってくれる相手を求めるのであり、ただ自分を苦しめるために拷問を行うサディストを相手として求めてはいない。ではこのような非対称性の関係の中で、マゾヒストが求める相手とはどのようなものなのか。ドゥルーズは以下のように述べる。

マゾヒスムにみられる女性の拷問者はサディストたりえないが、それは彼女がマゾヒスムの内部にいるからであり、マゾヒスム的状況に必要不可欠なものとしてあるからだということ、すなわち、女性の拷問者がマゾヒスム的幻影によって実現された一要素にほかならないからだという事実である。女性の拷問者とは、マゾヒスムの一環をなすものなのだ。

ドゥルーズは「サディズム」についても、「サディストの犠牲者」は「マゾヒストたりえない」とし、サディストの犠牲者は「徹頭徹尾サディズムに属し」ていると論じる。そしてマゾヒストにとって好ましい相手とは、自分と「契約」し、マゾヒストの求める拷問や虐待の作法について「教育」を受けた相手なのであり、この意味で相手はマゾヒストの世界の一部であるというのだ。

このようなドゥルーズの論を参照してみると、ハラムがエラ子の事を「お姫様」と呼び「奴隷」として従っていても、自分とエラ子の関係は神によってあらかじめ決められていたと言い張るその姿の裏側には、エラ子を自らの求める「お姫様」として扱いたい欲望がにじみだしていると見ることもできる。出会った当初からエラ子の「従順」な「家来」として上下関係を築いてきたハラムの振る舞いには、すでにエラ子をマゾヒズムの「幻影」として扱おうとする様子も感じられる。そもそもハラムの「運命」論は、こうした欲望に即して彼の中で構築されたエラ子を制御する論理である可能性も否定できない。ハラムが持ち出した「運命」論の陰には、自身のマゾヒストとしての欲望を満たすべく、エラ子を「教育」しようとする企みすら見ることができるのだ。実際「お姫様」として「教育」されたエラ子が、ハラムに嘘をつくなと命令するとハラムは「御馳走をみせつけられた犬みたいに眼を光らせながら」爆弾のことを話し始めるが、このときハラムは「奴隷」として「お姫様」の命令に喜びを感じ、自身のマゾヒスト的な欲望を満たしているのだ。

一方で中川は、関係を結ぶ際にエラ子が言葉を横領することを期待していた節がある。なぜならエラ子が「赤い表紙の本」の言葉を横領し、自らを「サクシュ」する資本家に位置づけることによって、中川は「サクシュ」される側のマゾヒストになれるからだ。つまりエラ子による横領は、中川による秘かな「教育」の一部であったとみることができる。結果的に横領によって生まれた「サクシュ」という関係を、マゾヒズムにおける「契約」として受け入れることによって、中川は自身のマゾヒスト性を大いに発揮できるようになるのである。実際、中川は「あんたから虐待されるんだからね」と言いながら、エラ子による

虐待に対し「薄笑い」を浮かべるのだ。いずれにしても、このようなハラムと中川にとって、この時点におけるエラ子からの命令や虐待は喜びや快楽であり、苦痛ではない。彼らは相手を苦しめることに喜びを覚えるサディストの拷問者ではなく、自分の欲望にあった拷問者を求めているといえる。つまり中川やハラムとの関係において、少なくともここまでの場面でのエラ子は、彼らマゾヒストにとっては「マゾヒスト的幻影」として捉えられている可能性が高く、エラ子自身もそうした役割を自ら演じていた節がある。「お姫様」や「サクシュ」する資本家という「幻影」を演じることで、エラ子はマゾヒストたちの欲望を受け入れているかにみえるのだ。

しかしそうした関係の中には「契約」や「教育」にとどまらない何か不穏なものが胚胎している。ドゥルーズはマゾヒストの相手としての女性が「マゾヒストにそそのかされて演じる役割を全うしうるか否か自分でもまるでわかって」いないため、「最終的なサディズムへと陥る危険」があることを指摘しているが、エラ子もまたマゾヒストの相手である「マゾヒスト的幻影」からサディストへ変貌する可能性があるのではないか。[注12] 先述したようにエラ子は「淋しさ」の解消のために、自身を危機に直面させていたが、一方でその陰には他者を支配する欲望を抱えていた。それはハラムの「運命」論を横領し、むしろ他者の「運命」を操ろうとしていたところにも垣間見える。「赤い表紙の本」の言葉を横領し、「サクシュ」する資本家として中川の欲望に応えていたのとは異なり、「運命」論を横領するエラ子には、ハラムの求める「お姫様」としての姿から他者の「運命」を操ろうとする、より過激な支配者へと変化する可能性を見ることができる。エラ子の「幻影」としての演技は、このような変貌の可能性を内包した不安定なものなのである。ではこの後マゾヒストの望む「幻影」として演技を続けることで、エラ子は自身の欲望を満たすことができるのだろうか。ここでは、こうした疑問を抱きながら爆弾の投下へ向かうエラ子の変化について追っていくことにしたい。

第三節　炸裂するテロリズムの快楽

その後、エラ子が権六に爆弾を落としたいと言っていたことを覚えていた中川は、ハラムから手に入れた「ココナットの実」の一つをエラ子に渡し、権六の頭上に爆弾を落とすことを約束させ、エラ子にテロを行わせようとする。エラ子はその要求を受け入れるが、中川が立ち去ると、爆弾を手に入れたことに「ズキンズキンするほど」の喜びを感じ、中川との「約束なんかどうでもいい」と口走って、笑い出す。すぐさま窓を開け、アパートの入り口を見つめるエラ子が考えるのは、中川が私服警官に捕まった時に爆弾を投げたらどうなるだろうかということだ。その様子を「モウモウと起こる土けむり……バラバラ散り落ちる家々の硝子窓……転がる音……投げ出す手……跳ね飛ぶ足……乱れ落ちる血しお……ホンモノの素晴らしいトオキー」と空想するエラ子の脳裡には、もう中川が伝えた権六の悪行を防ぐためのテロという大義名分もなければ、爆弾投下の約束さえ

存在していない。エラ子はただ、無目的に爆弾を落とし、眼下の風景が自らの手によって一瞬のうちに凄惨な光景に変わることに興奮しているのだ。

ところがエラ子がこのような空想に耽っていると、階下のアパートの入口で中川と権六が鉢合わせしてしまう。中川の手には、エラ子に託した爆弾とは別に、もう一つの爆弾が握られている。そこでエラ子は「今にも爆弾が破裂するかと思って」身をひそめようとするのだが、そんなことは起こるはずがない。確かに中川は爆弾を持ってはいるが、自爆テロをするなどとは一言もいっておらず、中川からすれば権六の頭上に爆弾を落とすのはエラ子の役割だからである。しかし自分の役割をとうに忘れているエラ子は、中川の所持する爆弾がなにかの拍子に爆発しないかと「何度もハラハラ」しながら期待する。すでに述べたようにエラ子は現実や生活を認識できない「淋しさ」に悩み、それを解消してくれる危機を求めていたのだが、こうしてふくらむ爆発の予感は、この「淋しさ」の解消を夢見させる。

とはいえエラ子の予感は、中川の爆弾が階下で爆発することに対するものである。仮に中川の爆弾が爆発したとしても、それは五階にいるエラ子の危機にはならない。つまりここでのエラ子の興奮の原因は、自身が危機に直面することではなく、中川の爆弾が破裂することで生じる他者の危機にある。そして権六と中川が小競り合いをするだけの光景に「つまらなくなって来た」エラ子は、自らの手で二人の頭上に爆弾を投下するのだ。爆弾は炸裂し、「汗ビッショリになるほど昂奮してしまった」とエラ子は語っている。これは権六を狙った政治的テロではなく、中川・権六以外の周囲の人物をも巻き込んだ、無差別の殺戮を狙ったテロであることに疑いはない。ではこのエラ子の無目的ともいえるテロをどのように考えればよいのだろうか。

この問いはテロリズムをどう捉えればよいのかという大きな課題と関わってくる。例えばテロリズム論の中には、橋川文三のもののように、テロを「人間存在のもっと奥深い衝動と広く結びついた行動であり、一般的にいえば、人間の生衝動そのものに根源的にねざした行動」であって「絶対的な自己表現に駆り立てられる場合に、しばしば選択する手段の一つ」とするものがある。[注13] またロシア革命など近代におけるテロリズムから現代までを広く論考の対象とする笠井潔は、「現実的な世界喪失」という言葉でテロリズムの発生について考察している。笠井の述べる「現実的な世界喪失」とは「世界をリアルなものと感じることができず」にいることであり、そのような者にとって、「世界はいつも他者たちのよそよそしい世界であり、彼はそこから永遠に追放されている」せいで、「芝居の書割のように非現実的に見える」。このような状態に置かれた人物は、独善的な理想や正義の「観念」を作り出し、自分が喪失した世界とは違った、自己の理想に基づく世界を構築し所有することで「自己回復」を試みるという。「普遍的な理念」に見えるものの中には「厚顔な自己正当化の欲望、自己美化の衝動」が張り付いているのだが、重要なのはこうした「自己回復」を行う人物が、「世界は私の世界ではない」ことを感じ取った結果、世界を

「粉々にしてやろう」と考え「他人の世界の掟を絶対的に破る」ことで自己の存在を絶対化しようと試みるという指摘である。[注14] 作中のエラ子が外の世界を「絵」として捉えている人物であることは既に述べたが、これは笠井がテロの起源として見出した、世界を「書割」のように見る「現実的な世界喪失」と照応するだろう。確かに世界から隔絶され、現実感を喪失しているエラ子はその世界自体を「粉々にしてやろう」と爆弾を投下する。しかし「つまらなくなって来た」からという軽い理由で行われる点で、エラ子のテロ行為は笠井のテロリズム論だけではなく、橋川のそれとも大きな隔たりがあることになろう。眼下の光景に飽きたから爆弾を投下したというエラ子に「奥深い衝動」や独善的な正義や思想といった「観念」を認めることはできないのだ。

では政治的な理念ではなく、エラ子の想像と現実の混同ぶりについてはどうだろうか。テロリズムにおける想像と現実の問題についてはスラヴォイ・ジジェクがアメリカの同時多発テロ事件について述べていることを参照してみたい。[注15] ジジェクは「九月十一日以降は、そうしたスクリーン上で幻のように見えていた亡霊が現実に入り込んできたのだ。現実が私たちのイメージに入り込んできたのではない—イメージが私たちの現実に入り込み、私たちの現実（すなわち現実として経験することを決定してくれる象徴的座標軸）を粉微塵に粉砕」するものであったという。こうしたジジェクの論に照らしてみれば、ジジェクが「スクリーン」の比喩で表している「幻」のような想像性が、眼下の光景を「眼の下のスクリーン」と見なすエラ子にも認められる点が注目される。この場面でエラ子は目の前の現実世界を「スクリーン」という自身の想像が投射される幕に変換してしまっているのだ。そしてエラ子のテロリズムの空想—窓が割れ、手足のちぎれる大惨事—は「ホンモノの素晴らしいトオキー」と語られる。注意しなければならないのはエラ子がいう「ホンモノの素晴らしいトオキー」としての爆発は、「ホンモノ」とは言われながらも、あくまでエラ子の空想、想像上の爆発だという点である。「トオキー」としてイメージされる爆発は、エラ子のなかで「ホンモノ」であると同時に想像であり、想像でありながら同時に現実でもあるのだ。無論、結果的に生じるのは現実に爆弾を投下することにほかならない。だが、エラ子の中ではそれは「ホンモノの素晴らしいトオキー」として想像した爆発を、想像のままに差し込むことに過ぎない。想像と現実を混同したエラ子は、想像のレベルにおいて罪悪感を免れ、爆弾の投下を「タッタそれだけ」の行為とするが、実際には現実の世界を破壊してしまう。「イメージが私たちの現実に入り込み、私たちの現実」を「粉微塵に粉砕」したというジジェクの指摘が照らし出すのは、エラ子のテロのこのような性質なのだ。

このようなテロリズムを更に考察するためには、視点をより現代的な問題に近づける必要があるだろう。現代におけるテロについて四方田犬彦はそのスペクタクルな性質について言及している。[注16] 四方田は「テロリスムは常にメディアに訴えかける」

とし、「テロリスムとは、現実的な破壊や殺人である以上に、その演劇的な表象として世界中に」伝播することが重要であると指摘する。またそうしたテロリストについて「イデオロギーの内実は別として、かならずやその当事者をして世界の頂点に立ちたいという願望」があるとしているが、実はこのような点はエラ子にも見られるものだ。作品冒頭で事件についての「トンチンカン」な記事を笑うエラ子は、周囲の人々が自分のことをエラ子だと気づかないことを「ユカイ」だと感じ、「持ち前のイタズラ気」で真相を書いた手記を残す。事件の真相を明かす行為を楽しみ、犯人である自分が逃げていることをも楽しみに変えるエラ子はまるで、自らが起こしたテロという犯罪の中で自らの存在を誇示しているかのようである。スペクタクルとして暴力を演出し、自分を捕まえられなければ「日本の警察も新聞記者も、みんなお馬鹿さんよ」とあざ笑うエラ子は、事件の演出家として主導権を握ることで、他者を操作し世界を支配しようとするのである。テロリストの「世界の頂点に立ちたいという願望」はここで、エラ子の支配願望や「淋しさ」と交差する。目の前の世界から隔絶されたエラ子は、現実を自身のイメージによる介入によって破壊することで、絶対的な自己を感じることができる。エラ子のテロは、そうした感覚の更に先に進み、自分の想像のままに世界を実際に破壊してみせ、破壊の支配者として「頂点に立ちたい」という欲望を達成しようとする、倒錯的でスペクタクルな支配の実現なのである。そして、そこには理念や強い衝動ではなく、他者を支配したいというサディズムが存在しているのだ。

こうしたエラ子の欲望が明らかになるのが、エラ子がハラムを射殺する最後の場面であろう。これはエラ子がマゾヒストの望む範囲から逸脱・発展した姿を描き出した場面である。テロリズムによって他者を支配することを実現したエラ子がハラムに死という苦痛のみを与えるドゥルーズ的なサディストへと変貌し、ここに現れるのだ。そのことによって「マゾヒスト的幻影」という不安定な演技からもエラ子は解放される。それは悶絶するハラムを「「恋」というものの詰らなさ」を「ゾクゾクするほどかんじさせられながら」「まだ死なないのか」と見下すサディストになることによってなのである。ハラムは「運命」という言葉でエラ子との関係を構築し、マゾヒストとしてエラ子と「契約」していたが、サディストに変貌したエラ子はそのような「契約」など平然と無視している。エラ子の支配の欲望は、こうして他者を危機にさらし、隔絶された世界を破壊するテロリズムと共鳴しながら、サディズムの欲望として露呈し、そうした変化によってハラムは射殺されるのである。つまりエラ子のテロとは、現実感の喪失をその端緒としながらも、理念や大義は存在しない、想像のままに現実を破壊することで支配という欲望を満たそうとするスペクタクルな犯罪なのである。このような犯罪を描いた「ココナットの実」は、サディストの女性が登場する久作の「煙を吐かぬ煙突」（一九三三年）や「女坑主」（一九三六年）とは異なる位置づけが可能であろう。確かに両作品には男性を貶め、時に殺害するサディストの女性が

登場する。だが、「ココナットの実」に描かれるのは、そうした女性像に加え、マゾヒストによる「契約」や「教育」、そしてサディストの誕生を描写しながら、それが如何に世界からの隔絶とその解消のためにテロリズムやスペクタクルな暴力と結びついていくのかを明らかにするものであり、久作のサディストを描いた作品の中では特異な位置を占めると見ることができる。[注17] しかも同時にそうした人物を描き出すことで、様々なテロの背後に渦巻く〈隠された動機〉を露わにしてしまうのではないだろうか。エラ子が「深い衝動」や政治的な背景を持たないために、テロの一般的なイメージである一九三〇年代の貧困やイデオロギー的対立、文明の衝突といったものの影に潜むものが浮き彫りになっていく。「暗い情念」や「天真爛漫」の更に奥にある、テロリズムに潜むほの暗い欲望。現実と想像を混同し、殺人の罪さえ感じることなく実行されるテロ。「ココナットの実」は時代を超えて、[注18] こうしたテロリズムに潜む不気味な欲望を冷徹に指し示した戦慄すべき作品なのである。

注

1　谷口基「解題」（『定本夢野久作全集1』所収　国書刊行会　二〇一六年）

2　種村季弘「解説　逃走のトポロジー」（『夢野久作全集6』所収　筑摩書房　一九九二年）

3　谷口基「解題」（『定本夢野久作全集2』所収　国書刊行会　二〇一七年）

4　山崎充彦「イタリア・ファシズム、その日本における受容と表現形態」（関静雄編『「大正」再考―希望と不安の時代―』所収　ミネルヴァ書房　二〇〇七年）

5　福家崇洋『日本ファシズム論争』（河出書房新社　二〇一二年）

6　片山杜秀『近代日本の右翼思想』（講談社　二〇〇七年）

7　河島真『戦争とファシズムの時代へ』（吉川弘文館　二〇一七年）

また一九三〇年の浜口雄幸銃撃事件も右翼青年によるものであり、その背後には「政党政治への不信」もあったという。この点については成田龍一『大正デモクラシー』（岩波書店　二〇〇七年）を参照した。

8　山口定『ファシズム』（岩波書店　二〇〇六年）

9　日産と軍部の関係については、読売新聞夕刊一九三七年十一月三日の「大本営と財界」という記事にみることができる。記事では「日産の満州重工業統制」という「我政治経済の変革に就ても亦二・二六以来の一貫したる血脈の強い響きを否定し得るものではない」としており、新興財閥・日産の躍進と「二・二六以来」の「血脈」の距離の近さが暗に示されている。また岸については原彬久『岸信介』（岩波書店　一九九五年）を参照した。

10　有馬哲夫『児玉誉士夫　巨魁の昭和史』（二〇一三年文藝春秋）

11　ジル・ドゥルーズ、蓮實重彦訳『マゾッホとサド』（晶

文社　一九七三年）

12 ドゥルーズ前掲書

13 橋川文三著・筒井清忠編『昭和ナショナリズムの諸相』（名古屋大学出版会　一九九四年）

14 笠井潔『新版　テロルの現象学』（作品社　二〇一三年）

15 スラヴォイ・ジジェク、長原豊訳『「テロル」と戦争―〈現実界〉の砂漠へようこそ』（青土社　二〇〇三年）

16 四方田犬彦『テロルと映画』（中央公論新社　二〇一五年）

17 なお「煙を吐かぬ煙突」では「資本主義末期の女」、「女坑主」では「虚無主義のブルジョア」という言葉があるように、彼女たちが所属する社会とサディズムの関係を分析することは可能であると思われるが、これについては別稿を要するだろう。

18 エラ子の政治的な動機に還元しがたいテロリズムは、政治的なテロと、個人的な動機による銃の乱射や車の暴走などの大量殺人とが区別し難くなっている今日の状況を照らし出している。そうした区分の困難な大量殺人とテロの関係を論じたフランコ・ベラルディは、現代の大量殺人者にとっては「犯罪者になることは、自分を世間に知らしめたいという精神病理的な欲求を表現する方法」であるとし、「大量殺人と自殺行為に結びついたスペクタクルなパフォーマンス」は「この十五年間に頻繁に起きている」と指摘している。そして、そのような「自殺を伴った大量殺人」は「何よりもそれがスペクタクルとして上演され、伝えられるということに対する強い意識を示している」と述べている。（フランコ・ベラルディ（ビフォ）、杉村昌昭訳『大量殺人の〝ダークヒーロー〟』作品社　二〇一七年）。現代の犯罪にスペクタクル性を見出すベラルディの意見を参照すれば、現代における大量殺人やテロが、エラ子のテロリズムと響きあう可能性も見いだせるのではないだろうか。

付記　「ココナットの実」の引用はすべて『夢野久作全集6』（筑摩書房　一九九二年）によった。旧字は新字に直し、ルビは適宜省略した。

（わきさか・けんすけ　博士後期課程）